

幼児の笑いとその保育における意味(6)

0 歳児の笑い

友 定 啓 子

五年間観察を続けていた子どもたちは卒園していった。取り残された私は〇歳児の追加観察を申し出た。この観察を始めた頃、私は乳児の笑いの研究はかなり蓄積があると思っていた。特に発達心理学の分野で微笑研究が細かく実験的な方法でなされていた。しかしそこでわかったことと保育がどのようにつながるのか、子どもの全体像とどう関連するのがよくわからないという感じを持つようになった。

一、「この子はよく笑う」

〇歳児のクラスに初めていったとき、私は先生に「この子はとてもよく笑う」と一人の子を紹介された。その子は七か月であった。ちょうど食事時で、離乳食を先生が一さじその子の口に入れるごとに「おいしーい」と言うと、目が輝いて顔じゅうで笑うのである。声はない。ひと口食べては笑ってくれるので、先生もうれしそうである。はじめ私は、この子は食べるのが好きなんだろうか、食べ物のおいしさに反応しているんだろうかと考

えて見ていた。しかしよく見てみると、本人の笑顔の前に保育者の方が笑顔を向けていることが多い。またあたり人がいないと、笑顔があまりでない。なるほど、一さじすくっては笑いかけている大人が、その子のその笑いをひきだしているのだ、そしてくりかえしているうちに、どちらが先なのかわからなくなっているということらしい。もし生理的満足感だけであれば、もう少し内発的な表情になるはずである。またそれが基盤にあるとしても、笑いかける保育者がいなかったら、このような顔いっぱい笑顔は生まれまいだろう。

△記録1▽ G子（二五か月）、牛乳を飲んだ後、左右を見

回してニーツと笑う。一口飲んで人は見て、ニコーツ。

笑わないときもあるが、たいいてい人にむかって鼻の上しわを寄せて笑って見せる。立ち上がり「アッ、アーツ」と声を出す。

これは別の子どもで、しかも一歳三か月である。私は

観察しながら、この鼻の上のしわが気になった。どうも意図的に感じられるのである。ふつう笑顔になる時は口角が先にあがる。鼻の上つまり眉の間にしわができるのは、目を意図的に細める時である。私はこれと同じ笑顔を別の子どもにも見た。それはB夫が先生にいわれて、大人の膝の上に乗って立ち上がるというお得意の芸をして見せた時である。周りの大人は喜んだが、B夫はそのときこの笑顔を得意そうにしていた。このG子の笑顔もそれに似ている。まだ言葉を持たない子どもの側からの積極的な表現のように思われた。

乳児の笑いの研究は発達心理学の中では六〇年代から盛んになり、早くから研究されたものの一つである。乳児は言語という表現手段を持たないので、「笑い」や「笑顔」が認知や理解の指標とされたのである。またそれが周りの人間関係に大きく左右されることから、「社会性」の発達の指標ともなった。前者の方は主に実験的な手法で行われた。後者は主に自然観察から得られた資料によっていた。そこで発見されたことは、乳児といえ

ども単に刺激を受けそれに反応するだけでなく、よりアクティブな動きをする存在だということである。その後の研究、例えば共鳴動作などの発見を経て、ますます人間は生れたときから社会的存在で、早くから周りの人間と関係を作る能力を持っていると考えられるようになった。

二、からだと出会っ

○歳児のクラスには、四月時点で、四か月以上一歳未満の子どもがいる。そして次々誕生日がやって来て一歳を越えていく。この間の運動能力の獲得はめざましいものがある。そこである時点をとってみると、ハイハイの子、つかまり立ちの子、つたい歩きの子、そして完全に歩ける子などが入り交じっていることになる。

△記録2▽ D夫（八か月）、はじめて、柵につかまって、

自分の力で立ち上がり、ニーツと笑う。

△記録3▽ A子（一二か月）、歩いたり、這ったりする。

観察者の方を見て、自分でニコッと笑って手をたたく。

△記録4▽ G子（二四か月）、はりきって段ボール箱を押して歩く。「ダダダダッ、ワワワワワー」と声がいかにも楽しそうに出ている。

△記録5▽ D子（二六か月）、階段を一段一段確かめながら降りていく。一段ごとに着地するとき、ニコッとえくぼが出て、「へーッ」を声を出して笑う。

これらの記録を見ると、日々成長している子どもたちがいかに嬉々として獲得した身体運動能力を楽しんでいるのがわかる。一人一人それぞれの課題は違うが、新たな身体運動図式を獲得し、それを作動させることが、大きな喜びなのである。それを周りの大人に共有してもらうことで、一層の確認をしているようである。

三、知的な笑い

△記録6▽ C夫（六か月）、ベッドで目が覚めて頭上のメリーが回るのを見ながら、楽しそうに長い間声を出してい

る。あごを突き出しそっくり返ってメリーを見つめている。

C夫はメリーのゆっくりした動きの中に、何か法則性を見つけたのだろう。口がパッカリあいて、今にもよだれを流さんばかりにしてみつめている。このメリーは動物が四つついていてだけの単純なものである。それがゆっくり回る。もしC夫が、どれか一つでも識別できたならおもしろいと感じると思う。しばらく待っていれば、その一つが必ずやってくるという予測がつくからである。あるいは、動物の顔そのものに反応しているのかもしれないし、「消えてはあらわれる」という認識かもしれない。いずれにしても知的活動をしていることは確かである。

△記録7▽ G子（八か月）、食事時からの茶わんをころがして遊ぶ。片手にもった茶わんをテーブルの上に放ると、カタカタとゆれる。その動きを見つめている。止まるとニッと笑う。これを繰り返す。笑わない時もある。ま

た、止まった後、持ち上げるときに笑う。そのうち、たたきつけてニッコリ。T先生と観察者に目が合うと、またまたニコニコとうれしそう。

茶わんを放り投げるなんてと思って、G子の顔を見るといかにも楽しそうである。G子は自分が茶わんを放るとテーブルの上に落ちて、反動でカタカタゆれることを発見していたのだ。自分の投げた茶わんの動きに予測をつけ、それを真剣に見つめ何度も確かめている。これはワトソンの「随伴関係の発見¹⁾」になる。ワトソンは二か月の乳児に対して様々な実験をして、乳児が自分の身体の動きと環境の間に関連性を見出したときに、喜びの声を発することを報告している。「○○すれば○○になる」と言う関係性の発見である。しかもこの関係の発見そのものが乳児に喜びをもたらし、能動的にすると言っている。また、同時にこれが茫漠とした外界の中にも一定の秩序があるという手がかりにもなり、さらに乳児自身が「外界をコントロールできる自分」という自己意識

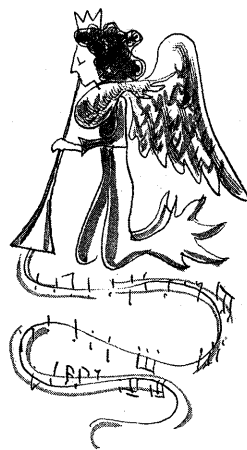
の感覚にもつながるのである。

△記録8▽ D夫（二三か月）、先生が「ぞうさん、ぞうさん」と歌いだすと、ふっとトコトコ歩いて箱のそばへ行き、そこに描かれてあるぞうの絵を指さしてニッコリする。

D夫は先生の歌の中に「ぞうさん」という単語を聞きわけ、それは箱に描いてある絵のことだと理解した。この笑顔は承認を求める笑顔である。まだ表現言語を持っていないけれども、このような形で概念、知識の獲得をしていることがわかる。もう少し大きくなると、自分でも言えるようになるので、そのときは自分で「ぞうさん」と言いながらにっこり笑って承認を求める。これは一歳児によく見られる姿である。

四、親しい大人の存在

このように○歳児は様々な体験を取り込んでいくので



あるが、その獲得には信頼する大人の存在が決定的に重要である。

△記録9▽ C子（九か月）、観察者の顔を不安そうに見つ

める。だんだん眉のあたりにしわが寄り、口元が歪んでくる。

次の週、前ほどすぐに不安にはならないが、食事時でも私がいると気になって、こちらをちらちらふり向く。目を大きく見開いて私を見つめる。しかしK先生が来ると顔がパッと輝いて、笑顔になりそばへいく。抱っこされてうれしそうである。

△記録10▽ D子（九か月）、T先生がそばを離れると抗議するようにあらんかぎりの声で泣く。戻ってくるとたちまち満面の笑み。

F子（八か月）、T先生が通りすぎるのに気づいて、突然「ウワー、ウワー」と泣きだす。

いつも自分のそばにいてくれる親しい人がいなくなる、不安定になって自分を失ってしまう。見知らぬ人が近付いても同様である。こういう姿を見ると、一人で遊んでいるように見えても、実は親しい人の存在があっけはじめて、それぞれの子どもの世界が成り立って

いるのだと考えたくなる。その人が遠ざかることは自分を失ってしまうに等しいようだ。「自他未分化」といつてしまえばそれまでだが、子どもにとってははもつと切実な問題である。その存在の確認はすなわち自己の確認なのだろう。だから、立ちあがれるようになった、階段も降りられるということも、それ自体が自分にとってうれしいことではあるが、そういう自分の状態を笑顔で承認されてこそ、自分も確認できるのだろう。ふりむいてニコツとこちらに笑顔を向ける姿はおぼろげながらも自己確認の姿ということになる。そういう親しい人の媒介を経て、徐々に見知らぬ人をも取り込んで行く。

△記録11▽ C夫（八か月）、T先生に立たせてもらう。私の方を見て立ちながらニワツとほほえむ。

△記録12▽ A子（一一か月）に、「A・子・ちゃん！」と声をかけると、顔をくしゃくしゃにして声を出して笑う。

△記録13▽ E子（一一か月）、こちらの方を見てニココリし、すぐまじめな顔になって向こうを向く。そして少し間

をおいてこちらをみてニコリする。これを二、三度くりかえす。

まずはじめに、大人の方が子どもに親しみを寄せ、笑顔を向けて行く。子どもたちはそのことで自分自身が承認され、また自分のしていることが認められていく体験を重ねる。その快い体験を重ねるうちに、子どもの方から意志を持って、それを引き出そうとするはたらきかけが生まれてくる。そして、彼らはさらにそれを自分と同じ子どもにも向けだすのである。大人のように確実に笑顔が返ってくるとは限らないけれども。

△記録14▽ F子(二三か月)は、E子(二三か月)が入っている隣のロッカーに上り、しきりごしにE子にニコーと笑いかける。E子は気がつかない。

△記録15▽ B子(二〇か月)、A夫(二二か月)、F子(一七か月)、B夫(一九か月)がテーブルを両手でガンガンたいて遊ぶ。顔を見合わせて楽しそうにしている。その姿

を別のテーブルから目覚めたばかりのF夫(二二か月)がニコニコと見ている。

こういう姿が見えるようになると、もう一歳児の世界につながるっていく。

○歳児のクラスにいて感じることは、「笑い」が半意識的に保育の基本方針に使われていることである。「この子は表情が乏しい」とか「このごろ笑うようになった」とか、言葉を持たない子どもたちの心身の安定のパロメーターのように使われている。個々の保育者の働きかけや言葉かけも、笑顔を向ける、笑わせる、快適な状態にするということに尽きるようだ。子ども自身がよい状態で外界を受け止め、とり込んでくれるよう働きかけられているということになる。

五、終わりに

幼児の笑いを追いかけてきてわかったことは、笑いからだ、認識、人間関係の三つの位相にわたっており、し

かもそれらは互いに関与しており、全人格的なものであるということである。また、笑いは外界に対する主体の反応を表している、同じことを体験していながら、笑う子とそうでない子がいること、同じ子どもでも笑える時とそうでない時がある。そこから、「笑っている」というのはその体験を喜びを持って受け止めているということを表しているのではないかと考えられる。幼児期全体にわたって、自分のからだに向き合うこと、外界を知的に受けとめること、親しい大人や子どもに出会い人間関係を作っていくことなど、世界をとり込んでいくことに成功した時に、笑いや笑顔が出てくる。そしてもっとも大事なこととして、自分に出会うこと、よい自分になろうと努力し始めること、失敗などの危機において自己を守ることなど、笑いは自己をよい状態に保とうとする自我の働きに深く関わっているということがあげられる。

今回は、保育者の笑いの研究まで至ることはできなかったが、子どもたちの笑顔と同様に、いやそれ以上に保育者の笑顔が重要であることは間違いないと思われる。

る。保育者の笑顔が子どもたちの笑顔を育てるといっても過言ではないと思うし、その笑顔は子どもへの体験への共感の中から生まれるものだと思う。

— 終 —

引用文献

- 1) Watson, J. S. "Smiling, cooing, and the game." Merrill - Palmer Quarterly, 18 : 323 - 329, 1973

(山口大学教育学部)